荘厳と廻向（5）

安田理深

ともかく、願心荘厳というものは、願生彼国を欲生我国に帰すのである。彼の国を我が国に帰す。行くのは帰る所以だと。願心荘厳ということは、ある意味で重要な結論であるのだけれども、結論というよりも、世界というものを見る眼を脚下に転ずることばです。終りへの意思……、その終りへの意思を転じて、どういったらいいでしょうか……、むしろ Grund であると。浄土というものを終りとして見ている眼を転じて、浄土は Grund だと。終りへの意思を転じて、Grund への意思とする。転換する。そういう意義が願心荘厳ということばです。浄土は理想として描かれたものだという眼を転じて、浄土は現実であると。現実をして現実たらしめるものだと。現実の深い意味だと。こういう意味を与えているのが、願心荘厳ということばです。

大体、願生ということが、外に向って願生するのじゃない。結果に向って願生するのでなしに、根元に向って願生する。こういう意味がある。そういう眼を開くというと、二十九種荘厳功徳というのは、開けているけれども、外に開けているのではない。内に展開しているのである。内に開けている。実験観察するにしても、科学の実験観察と違って内に向って、根底の方向に向って観察思惟する。

如何に願生しても、願生しつくされない。願生というのは無限の道という意味である。願生して済んだというようなものじゃない。無限の道という意味である。願生して得るところがあり、満足するというところからいうと得生である。得生のない願生ではない。だから得生するけれども、得生する力がさらに願生させる。願生から得生へというよりも、むしろ、得生から願生へ。それがつまり、方向転換である。われわれは、得生せぬから願

生する、得ぬから願う、得れば願わぬ、こういうのが理知である。そういうのを理知という。得ないから願う、得れば願えない、宗教心とはそういうふうなものではない。得るが故にむしろ願う。願といっても、ただ徒らに願うのではない。すでに、得生という意味で、成就している。得生からいえば成就している。成就せぬから願うのではない。

願といえば一つの欲求である。願といえば、そこに Wille とか Wollen という意味がある。満足したものが、満足に腰をおろさぬ。満足したものが、満足したからといって止めない。無限の道というようなことが、願生ということばの現わす意味じゃないか。

二十九種というようなことを云いましたけれども、そういうことは『浄土論』が始めてじゃない。無著の『摂大乗論』が初めである。『摂大乗論』に十八円浄ということがある。円浄ということば、これは真諦三蔵の訳語です。円満清浄ということです。円満清浄ということは何を現わすかというと、瑜伽の教学では諸法というものについて、三性ということをいう。三種の自性ということをいう。それはもとは『解深密経』ですけれど、護法では遍計所執性という。それから依他起性、円成実自性という。この円成実自性というような意味を現わすのが、円浄ということだと思います。円成実自性というのは、円と成と実という意味ではない。円満成就しているということが真実だと。だから真実性とも訳す。真実というのは、どういうことかというと、円満成就しているということである。これが如来の世界というものの本質である。こういうわけです。

それの正反対になるのが、遍計所執性である。遍計所執というのは、ことに護法が修正した概念ですけれども、言葉からいえば「分別」ということである。真実という概念に対応するものは分別である。分別でないことが真実である。真実でないことが分別である。簡単にいえば分別であるが、その分別の意味を厳密に云おうとするから遍計所執という。計というのは計度という意味です。分別というのも、厳密な意味の分別は計度（けたく）するということである。よく親鸞の教学で「はからい」ということを云います。はからいというのは計度である。

分別ということは広い意味をもつ。分別ということを云えば、意識一般の本質なのである。知覚であろうがなんであろうが、意識一般が分別であるが、特に思惟の分別、知覚でなしに思考の分別というときに初めて計度と

いう。主観の分別ですね。つまり、思惟というもの自身が悪いわけではない。思惟が直覚の内容を失って、直覚を離れて自分自身で考えるようになれば、思弁である。それを計度という。それによって執着されたもの、固定されたもの、人間の計度によって固執されたもの、こういうものがつまり虚妄というものである。考えられたものは嘘だということです。遍計所執とは、考えによって考えられたもの、ものそのものじゃない。ただ考えられたものである。こういうような概念で区別してある。

まあ、だから穢土といえば遍計所執の世界である。雑染世界というのは、分別によって固執された世界である。その分別を破って真実がある。浄土というのは、真実の世界ということである。

だから真実といっても、合理的ということではない。理屈に合うたのが真実というのじゃない。真実というのは、悟られるものである。理に適うもまた悟りにあらずということばがありますね。理に合わないのも悟りじゃないが、理に合うのも必ずしも悟りというものではない。人間は理に合うのじゃないというと理に合わないのだと思う。理に合わないのが嘘だというと、理に合うのは嘘じゃないと、こういう具合に考えて、それ以上に出れない。理に合うのも人間の計度ですし、理に合わなくても、非合理性というのも計度なのです。合理的なのばかりが計度ではない。非合理性も計度である。

不可思議というところで始めて覚りの世界である。不可思議というものは理性でつかめないものだ、と云った場合には、不可思議が不可知になる。この不可知だとか、非合理性だとかいうのはやはり理性の立場から見た存在である。ものと成っているわけではない。ものの外にあってものを見ている。

円成実ということが、『摂大乗論』では十八として考えられている。『浄土論』の二十九というと、大変な違いのようですけれど、二十九種荘厳功徳というのは、内容からいうと国土荘厳と仏荘厳と菩薩荘厳との三種がある。国土荘厳が十七、仏荘厳が八、菩薩荘厳に四ある。後の二つは衆生世間といい、国土荘厳の方は器世間という。非情世間と有情世間。こういう意味が区別される。だから三種というけれども、二種の世間がある。仏荘厳・菩薩荘厳は、本来、国土の中から展開したものだ。だから『摂大乗論』では仏荘厳・菩薩荘厳というものが、本来、国土荘厳の中に含まれている。そういう形で出ている。だから『摂大乗論』の十八が、『浄土論』では十

七になっているのだから、それから見ればあまり変らん。

国土荘厳の中に包まれているものを更に展開したというところに、世親の修正がある。こんなことは、単純なものが複雑になったというようなことですけれども、一番大事なのは、ただ数がふえたというだけでなしに、数もふえたし、内容も洗練されたし、配列も異ったというようなことがあるわけです。

何でもないような話だけれども、経典の上でいうと、四十八願の経典というものも、初めから四十八願ではなく、三十六願であった。もっと古くは二十四願というものがあった。本願の経説も次第に発展してきておる。成長しているということがある。これは宗教心の成長なのです。初めからきちっと教科書のようにできているのじゃない。『無量寿経』というのは教科書ではない。歴史をもっているということが大事なのですね。宗教心というものは歴史をもつ。

宗教心というものが、人間を支えているものであるにもかかわらず、人間はその宗教心を忘れる。忘れるということは、欠除しているというような消極的な意味ばかりじゃない。忘れるということは、反逆である。何故かといえば、本を忘れれば、自己自身が本と成ろうとする。本を忘れるということは無明です。本を忘れたら本がないままで諦めておこうというものじゃない。本当のことが分らんというと、今度は本当でないことを本当にせざるを得ない。もとを忘れるというのは、無明ですし、自分がもとと成ろうというのは顚倒です。無明というのは、単にもとを忘却したという消極的なことですけれど、消極は単なる消極的でなく、却って大きな積極の意味をもつ。その積極性を表わして反逆というわけです。反逆性ですね。

ただしかし宗教心というものは、自己に反逆するものをもって自己を錬磨する。自己に反逆するものをもって、却って自己とする。それがつまりアガペーということである。宗教心のいたみである。

悲願ということがありますね。願というのは意思ですけれど、悲願という場合は生 Leben への意思でもないし、また力 Macht に対する意思でもない。悲願というのは救済への意思です。それが Glaubenswollen です。権力意思でもないし、盲目意思でもない。生きんとする意思、ショーペンハウエルの云うような盲目意思Blind-Willというものでもない。ニーチェの云うようなMachtに対する意思でもない。愛の意思、アガペーへの意思と

いうのが、悲願です。

宗教心というものが、そういうように語られている。『浄土論』でもそういうことがあって、十八の円浄が二十九種になるところには、数がふえ、配列が変えられ、内容が純化される。こうして無著・世親の二人によって、国土の法というものが確立した。それを法とすることによって、国ということが成り立つ。つまり、大工が家を作るように、宗教心が浄土を作るという表現、それは一つの物語り、神話です。そういう形に置いてある。けれどもその意味は宗教心というものが、人間の根底となろうとする。宗教心というものこそ、人間の国土となろう。そういうように自己を限定してくる。平凡なことばでいえば、人類の影となろう、人類のオアシスであろう、これが国土荘厳の意味です。だから宗教心が国土となろうと。その国土ということは、どうして成り立つかというと、国土の意味を満たす為に、十八とか二十九という数が選ばれている。

これは、やはり特定の時代において、特定の形を取っているのですから、こういう数というようなことは第二義的なことだろうと思うのですね。これに類することでは、例えば浄土には池があると書いてある。これはやはり暑いインドの背景ということを考えるとすぐ分る。熱帯の宗教です。そんな具合に、経典というものもインドでできたという制限はもっている。けれど宗教心が、インドでできたということは云えますまい。宗教心はインドを越えたものでしょう。インドを越えたものだけど、インドでできた。インドを破ってしかもインドで形を取った。こういうことが大きいと思う。

だからして、インド民族が大乗仏教を生んだということは、インド民族が自己を犠牲にして、自分より大きなものを孕んだといえる。それが民族国家のもつ意義じゃないか。民族国家が世界となるという意味じゃないか。日本が日本の為に日本を作ったって何にも意味がない。日本は日本以上のものをもつ。その為に仕える。こういうところに、民族という問題が解決できるのじゃないか。今日、民族主義ということが、現実の問題として迫っていますね。

まあ、一番大事なことは、浄土の論には、一般というものがある。国土一般というようなものです。国土一般というものが、十八の円浄である。ところが、数が増えるとか、洗練されるという以上の意味があるのは、『浄土論』は、浄土一般というものじゃなしに、『無量寿経』

の経説、『無量寿経』の浄土を語っているということである。浄土一般、諸仏共通の浄土というのが、無著の浄土である。それに対して、世親のは安楽浄土、特に安楽という意味をもった浄土ということです。そういうところに、大きな違いがある。『浄土論』には、『無量寿経』の浄土という意味がある。

浄土は『無量寿経』だけが語っているなら、世自在王仏が二百一十億の諸仏の国土を覩見したというようなことはありゃしない。浄土は『無量寿経』だけじゃないから、二百一十億もあったのでしょう。例えば『十地経』でも、第八地というのが浄土の問題ですね。浄仏国土の行というのが、第八地の菩薩行です。国土自在と。ああいうように、国土というものは、別に『無量寿経』だけのものじゃない。やはり、国土というものが、『無量寿経』だけの特殊なものではない。一般的な意義をもつ。一般的に求めているけれども、得られない。得られないけれど求めずにはおれない。こういうのが国土というものです。そういう問題をうけてくるわけです。何も、人にないことを云うというのじゃない。皆が求めているけど、それが分らない。こういうところに『無量寿経』の意味がある。一般に対する特殊というものじゃない。

まあ云って見れば、弥陀の浄土ということになります。しかし、仏一般に対して、弥陀仏というのはどこに意味があるか。これも問題があると思う。これも、初めから弥陀仏というものが、特殊だったわけではない。あらゆる仏の中の一人である。十方の中でも西方の仏、『阿弥陀経』の中でも、西方のところに〝無量寿仏〟という名前の仏がでている。一応、阿弥陀仏というものは西方の仏である。これなら各宗が認めている。真言密教でも、西方に阿弥陀を置いてある。あらゆる場合に共通です。

だけど、しかし、そういうところから次第に成長してくるのです。やはり、諸仏の中の一仏だというところが初めでしょう。ところが、自然に、阿弥陀仏というものが、何か諸仏というものの、単なる特殊じゃないという意味がでてきた。それも、議論を戦わして出てきたというものじゃない。自然に出てきた。宗教心の展開の自然として、つまり何か、阿弥陀仏を見ると自然にそこへ帰する。そうなるようなものが現われているのじゃないか。簡単にいえば、上も下も東も西も浄土だと、こう云って見ても、それに違いないけれどもね。西は絶対だといっているのじゃない。西というのは東があるから西がある。

しかしどうも西という方に、何か万物の帰するところというような感情の自然がある。西方というのは、何か理屈で立てたのではないのであって、人間の感情の自然なのです。西方、あらゆるものがそこへ帰って行くところ、つまりニルヴーナの教説ですね。東に涅槃があるとも云えないことはないけれども、感情の自然ということがあるのです。理屈でそうしたというものじゃない。理論闘争で諸仏を負かしたというものじゃない。自然にそういう具合になっていく。こういうところがある。

大体、方角ということは、人間にあることである。存在にあるわけではない。ものそのものにありゃしない。何か、忘れていたものに人間が目覚めた場合に、人間に方向ができる。だから方角というのは人間にあるものだ。人間に方向が成り立つのだ、これは大きなことですね。だから、宗教心がないと、人間は無方向なのだ。方向が決まりゃいいんじゃないか。別に楽に成らないでも、方向が決まりゃ良いじゃないか。現代の人間は、ただ忙しい、何の為に忙しいのかといったら分っていない。ただ忙しいというようなことをいっている。何かスピードそのものに魅力を感じている。待つのは五分待つのもたまらないという。車に乗ってスピードさえ出していれば、一時間でも早いような気がするという。何の為に急がなければならないのかといったら分らない。こういうことになる。つまり皆、方法が分らないものなのじゃないか。

宗教心というものは、単なる点じゃない。方向をもった点である。一点一点が方向をもっている。円の方向ですね。入るとか出るとか、入出二門というのは、どの点を押えてみても、円環の方向をもっているということです。

そういうようなことから、弥陀というのは一般のただ特殊化されたものではない。何か、宗教心が初めて自分を云い当てることができたというのが弥陀なのです。諸仏の浄土でもよいけれども、未だばく然とそこに自分を現わそうとするものがある。光台現国というのは、諸仏の浄土を表わしている。云い表わしたけれども、云い足りない。その云えないものを初めて完全に云い表わすことができた。形のない宗教心が自分を語ることができた。そういうのが、弥陀の浄土というものです。未だ諸仏の浄土じゃどうも云い足りない。初めて自分を云い当てることができた。つまり表現となることができた。宗教心が完全に表現となることができた。

そういうところから、阿弥陀仏の特色は「願」であろ

うと思う。阿弥陀仏をして、阿弥陀仏たらしめたもの、阿弥陀仏の独自の意義は願にある。十八願にある。諸仏の浄土というものは広さが百畳敷だ、阿弥陀仏の浄土は千畳敷だと、そんなことを云って見たところで、云い当てられないと思う。願というところで人間を打つ。四十八願というところで、人間に訴えるものがある。そういうものが、自然に方向を決定してくる。

『般若経』とか『華厳経』というものがあるが、頭の良い人を打つのが『華厳経』というものである。これは思想家に訴えるものがある。あなた方はどうか知らないけれども、私は自分の経験からすると、大乗経典を読んだ中で、『無量寿経』というものは、始めあまり興味がなかった。やはり『華厳経』とか『般若経』というものは、非常に好きでした。それが当り前なのじゃないか。若いくせに『無量寿経』が好きだなどというのは、一寸間違いじゃないか。若年寄というものじゃないか。若い時にはあまり感銘を受けないものですね。思想的要求の盛んな青年に、『華厳』とか『般若』が好かれるのは当り前ですね。『無量寿経』というものは、やはり何か苦労した人間に分るものである。生意気ざかりの青年向きじゃない。苦労人、生きることに虐げられた人間に訴えるものがある。能もない、知恵もない、足もないものも、うなずくことができる。こういうところに『無量寿経』というものの特色がある。けれど安物という意味ではない。愚かなものもうなずくけれども、賢いものもうなずかざるをえない。般若の経典ですらうなずかざるをえない。如何に愚かなものでもうなずくことができる。感動することができる。如何に賢いものも、うなずかざるを得ないものをもっている。こういうようなことが、本願にあるのです。そういう世界に、西方というような人間の帰するところが、ささげられている。これが自然じゃないか。理屈でそういっているのではない。

そういうものを大乗経典はみな表わそうとする。『法華経』の久遠の仏というのも、真言密教の大日如来ということも、皆そういうことを表わそうとする。けれど、大日如来というような大風呂敷を拡げたようなものじゃ一向響いてこない。話が大きすぎてね。また久遠といっても、ただ古いというようなことをいっても、話が響かんじゃないか。新米の仏じゃないのだ、久遠なのだと、ただびっくりさせるだけの話じゃないか。久遠の仏だとか、遍照金剛だとか、ただ大きいというだけの話じゃないか。何か我々の宗教心に訴えるものが、そこにあるの

だろうか。それが大事なことじゃないか。

大乗仏教は何か同じものを色んな面で表わそうとする。尽十方無碍光如来ということと、大日如来ということと、同じことでしょう。尽十方無碍光ということが、大日ということである。また、無量寿ということは、久遠の命である。常住の法身である。そういうように、大乗経典というものは、喧嘩するものじゃない。喧嘩するのは、坊さんが喧嘩するだけの話である。真言の坊さんと、真宗の坊さんが喧嘩するだけじゃなくて、大日如来と阿弥陀さんが喧嘩したというのは聞いたことがない。

いろんな面から云い当てようとする。いろんな面で云い当てられるけれども、それで終りではない。こういうのが実在というものである。どんな点でも、一点から観点をもつことができる。けど人間はそれだけしかできない。けれどもそれによって実在が尽きるものじゃない。ある観点から捕えられる。しかしそれは捕えられないものが捕えられるのである。むしろ、捕えたことによって、捕えられないものがよく見える。こういうものじゃないか。

それが謙譲である。哲学というものは、この謙譲を忘れるというと、自分のいったことが絶対的だと主張する。そうするとヘーゲルみたいになってしまう。人間が捕えるものは、人間によって捕えられたものだ。人間に賜わったものだ。もの自身は無限のものだ。一法界ということがこれで云えるのではないか。大乗経典は、おのおの一法界を語っている。法界そのものは無尽の法界である。これで仕舞いということは云えないものだ。

無著・世親というのは、瑜伽の論家ですけど、どちらも浄土論を扱っている。そして大事な共通点は真実の世界です。真実の世界というものは、分別に与えられるものじゃない。分別というもののないところに一分を与えられる。真実ということは、だからして智慧に与えられるものです。智慧だけに与えられる。真実というものは、真実に覚めた人に与えられるものである。覚めないものに与えられるということはない。覚めないものには覆われている。つまり、真実というものは、覚めないものにもあるけれども、覚める覚めぬを超えて与えられているけれども、しかし、与えられたということを受けとるのは、覚めた智慧だけである。これは大きな問題です。

我々は得るという。獲得する。さっきは成就と云いましたが、これはやはりインドの論家が非常に注意している概念である。獲とか、得とか、成就とかいうのは、同

じ内容を表わしている。獲得と成就とは大分違うようだけれども……。だから煩悩成就ということをいう。煩悩成就の凡夫というのは、曇鸞のことばです。（有凡夫人煩悩成就――『論註』巻下編集部注）煩悩成就とは、煩悩を獲得するということと同一の意味である。結局、「得」の一字に代表される。未だ得なかったものを、初めて得たというのが、獲である。一度得れば、失うことがないというのが成就である。インドの論家が得ということに注意したのが面白いと思う。これはどういうことでしょうか。僕はこの意味を充分に押えることが、長いことできなかった。僕は今年学校を停年になりますが、停年にもなって初めて分るものか。そんなものかも知れない。なかなか分らないものです。

智慧を得た方はよく分らないが、煩悩を得る方はよく分る。それで、我々は、生活に意味を持ったようなもの、財とか、ものとかを得たというが、そういうことは実は成り立たないのである。我々が金を得たというが、実は金に対する愛着を得たのである。金が欲しいという経験を得た。金を得るということは成り立たない。持っている金を、これを得たというなら、成就しているのですから、落とすはずがない。すりにすられたとか、そういうことがあるはずがない。煩悩がすられたということがあるかね。煩悩を落としたとか、煩悩をすりにすられたということはありゃしない。金にはある。そういう区別、そこに深い意味が語られている。金を得るということはない。金は金の法則によって動く。客観的なものである。経済法則です。得たとか、得んとかということはあるものじゃない。経済法則によって動いていく。ただしばらくの間、自分の懐からひとの懐に停滞していたというだけの話である。自分の懐からひとの懐に移ったというのは、我々から云うだけの話で、経済の方からいえば、懐とも思いはしない。法則に従って動くのみである。経済の意思が、日本をいじめてやろうとか、この国は困っているから助けてやろうとかいうことはない。愛国心というようなものもない。冷たくも暖かくもないのが法則というものだ。

こういうところから考えてみても、いろんな問題があるけれども、真理については、真理を得るということはどうしてあるか。真理というものは知っても知らなくても変らないものが真理です。知ったからふえるというものではない。知らないから消えるものでもない。二と二を加えれば四になるという算術の真理は、加えたということから基礎づけられているわけではない。加えたから

四になったのじゃない。加えないでも四になる。こういうような意味がある。だから真如という。如ということは変らないということだ。真は真実、如は如常という意味である。真理というものは変らない。真実というものは、悟ったからあるとか、悟らぬからないというものと違う。悟ったとか悟らぬということによって変らないものを如という。これが真理というものである。こういうこと一つ考えると、真理を得るということはできないじゃないか。真理についての智慧を得るということは、これははっきり云えるのじゃないか。真理についての智慧を得る。真理を得るということはない。ただこう云えると思う。真理は智慧として得るのだと。如来でもそうである。如来というものになるとか、如来を得るということはない。如来というものにふれるということは、信心としてふれる。如来は信心としてふれられる。如来の方は、人間にふれているけれども、人間の方は必ずしも真実にふれていない。こういう区別が大事でしょう。

真理は変らないものだというので、真理は真理自身で支えられるのであるという考え方がある。西洋でいうならボルツァーノが有名ですね。Satz an sich という。文章自体という思想がある。真理自体ということから、意味自体とか、Wahrheiten an sich という。そういうような意味が、真理の真理性である。超越性である。つまり、真理は真理を知るという作用を越えている。真理を知るという意識作用を越えている。意識作用を越えてそれ自身を維持している。

そういうものを仏教では法性という。法というものは、持という性格をもつ。保持とか維持の持、halten, hold です。自己は自己自身を維持している。そして規となる。標準となる。規というのは、まあ規範というような意味です。規は、「先だつ」ということです。真理自身というものがあって、これが真理であるといえる。あらゆることが、これは本当だ、これは嘘だということが云われてくるのは、真理自身というものがなければならない。この真理に照らしてこれは真理だと。

つまり、これは美しいものだという場合には、美しさそのものがなければならない。美しいものにおける美しさそのもの、美しさのイデーですね。美しいものは、我々の知覚の内容になるけれども、美しいものにおける美しさは知覚することはできない。プラトンもそういう。しかし美しさというものがあって、初めてこのものが美しいという判断が成り立つ。判断作用に先立って、判断

する規範となる。そういうものが、真実を維持しているようなものですね。こういう意味が法性にある。法の法たる本質 Wesen というような意味である。これは非常に大事なことです。

こういうことからしても、真理を得るということは云えない。真理は智慧として得るのである。如来というものを信として得る。だから如来を求めんと欲するものは、先立って自己を明かにせよ。如来を追っかけてみたところで、如来に会えるというわけではない。如来というものにふれようとするならば、ふれようとする自己を明かにする。自己を明かにすれば、そこに如来は来たらずして来るのだ。急がば廻れである。

こういう構造は、もっと考えれば、存在と自覚の構造だと思う。存在はあらゆるものにある。或る人だけにえこひいきするものでない。存在はあらゆるものに与えられている。先天的施与である。しかしながら、あらゆるものがそれを得ているわけではない。智慧のところにのみ、それは得られている。智慧のないものにも与えられているけれども、与えられているものを得るのは、智慧だけである。

だから、与えられているものは、人間の権能を越えている。人間の努力は得るか得ないかにある。人間として生きているという意味は、そこにある。人間の義務は、真理を造るところにあるのではない。真理は誰にでも与えられている。ただそれを自覚するかせぬかにおいて、人間存在の義務を尽すのである。与えられている世界というものの要点は、獲得にある。与えられているということを円周とするなら、円周の一点というのは得にある。

願というのは与えられた存在を現わす概念ですし、信心というのは得を現わす。だから本願の要は信心にある。あるいは、念仏の要は信心にある。念仏は法でしょう。信心は機です。機を越えているものが念仏である。しかしながら機をまって働くのだ。機をまって真理は働く。真理は目覚めるか、目覚めぬかを越えてあるけれども、しかしその真理は目覚めることをまって働く。働かぬなら、真理はあっても、ないに等しい。だから、人間の自覚を存在は越えているけれども、存在の意味を決するのは、却って人間の自覚である。奪い奪われる形です。

確かに存在は人間を越えている。その存在の働きの結果として、信というものを開いてくる。自覚というものを存在は越えている。存在は自覚に対してはむしろ包越的なものである。しかしながら、その存在も自覚されな

ければないに等しい。自己を越えているものを、生かすも殺すも自己である。法から生れたものが却って法を包む。存在と自覚の構造はこういう構造なのである。存在と自覚というものの連関を保っているのが意味という概念である。存在は意味を人間に与えている。しかし意味を得るものは自覚である。意味は人間を越えて人間に与えられている。意味が働くということが利益（りやく）である。

こういうわけで、智慧ということがあるのですけれど、智慧ということは、心といってもよい。識といってもよい。智というものは、識にあるものである。だからといって識というと、すぐ主観だと云うのはいけないと思う。どうもヨーロッパの思考法というものは、仏教からみると、どうしても我執というものが抜けない。向うは罪ということを云うが、執ということがない。この間、米沢英雄さんが来られて、あの人はフランクルを研究しているのだが、どうもフランクルには罪は出てくるけれども、執ということは出てこないという。仏教では、執を罪という。キリスト教では何が罪かというと分らない。だからどうも聖書の神話に基づいて、罪というのは神に背くことであるとする。Gebotに対する反逆であるという。Gebotは十誡というようないましめである。けれども仏教で反逆という場合は、そういうような神に立った誡めではない。仏教の戒は、言論のない戒ですね。そこが大分違う。仏教では背くといっても、自己に背くのですね。自己自身に背くのです。何も他人に背いているわけではない。そういうことがあって、どうもヨーロッパの思想には、我ということがあるように思う。従って識ということを考えるとまたすぐ主観だと考える。意識は人間の主観だという考え方が、幾らいってみても残っているように思う。

智とは識が主観を破ったものだ。識が情（妄情）である場合に主観である。主観として考えられている意識が情である。主観を破った場合に智である。智というのは識でないのではない。窓をもっている識である。情というものを克服した識である。つまり、さっき云った執というのは、情執です。主観の固執ですね。情執、それに対して智は慧である。主観が自己の情執を克服したのが慧です。智慧となった識。だから識を捨てて智慧を得るということは、ことばではそういうけど、識を捨てて智慧を得たなら、そういう智慧なら天下りです。知らない間に目覚めていたということになる。キリスト教の知恵は神の知恵であって、ギリシア人の知恵とは違うという

場合のギリスト教の知恵は天下りですね。この世の知恵にあらずとか、ギリシァ人にとってはつまずきであるとか、不合理なるが故に信ずるというようなことを云います。つまり神秘的なわけです。

仏教の智慧はあんな意味じゃない。自覚という意味である。廻転である。転というのが自覚である。智慧を得たということは、智慧を転得したのである。情執を転捨して、智慧を転得したのである。つまり識の廻転である。情執として働いていた識が廻転されて、智慧となった。それで自覚となる。Aを捨ててBを取って来るなら、Bは天下りになってしまう。信仰というものを語る場合は、こういうことになりがちである。信仰は理屈ではないというようなことをいって、狂信的になるのはそれである。

（本講は、昭和四十一年八月石川県信行寺における講義の筆録である。　文責　本多弘之）

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。